武田祐吉

増訂 萬葉集全註釋 三

本文篇 一（巻の一・二）

角川書店

（全十四巻）

昭和三十一年八月十日　初版發行
昭和四十三年五月二十日　七版發行

増訂萬葉集全註釋　三巻の一・二

定價　八百圓

著作者　武田祐吉
發行者　角川源義
印刷者　中内あき子
東京都豐島區高田一ノ十二

發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見二ノ十三
振替　東京一九五二〇八番
電話東京（265）七一一一（大代表）

（落丁・亂丁本はお取り替えいたします）

© 1956　Printed in Japan

中光印刷・鈴木製本

凡例

一、本書は、萬葉集の全部について註釋し、分冊して刊行する。この一冊から以下十冊は、その本文註釋の分で、各卷の註釋を順次分載する。

一、各條とも、初めに原文を掲げ、次に書き下し文、譯、構成、釋、評語、參考等に分かつて、これを註釋した。但し歌詞は見易いように、上部に書き下し文を掲げ、その下に原文を載せた。

一、原文は、主として定本萬葉集に依つたが、その後の研究に依つてこれを改めたところもすくなくない。定本萬葉集に依つたところは、本文研究に關する記事をそれに讓つて省いたものも多いが、改訂したものは一々これを記した。定本萬葉集は、西本願寺本を底本とし他本および諸説によつて改訂を加えた本である。今、異體字は、なるべく普通の字體に改めたが、尓祢弥鵜のような字形の相違の多いものは原形を殘した。但し解釋中に引用する場合は、便宜上、爾禰彌獵などの普通の字體によつた。原文は、漢文の部分には句讀點、返り點をつけ、歌謠の部分には、各句ごとに空白を置き、返り讀むべきものには返り點をつけ、漢字の右傍に片かなの訓をつけ、別の讀み方の參考とすべきもののある場合に限り、漢字の左傍にも訓をつけたものがある。

一、書き下し文も、主として定本萬葉集に依つたが、これも改めたところがすくなくない。殊に定本萬葉集に愼重を期して訓を缺いたものも、本書にはなるべく訓を下した。原文の簡易なものは、書き下し文を省略したものもある。歌の書き下し文の上にはその歌の番號を附した。この番號は國歌大觀の附けた

ものに依つたが、これは廣く行われているものである。歌詞の部分は、とくに行をわけて記し、これに相當する原文を、その行の下に掲げた。また」の記號を入れて、段落をあきらかにした。

一、譯は、歌謠に限り、現代語譯を附けた。なるべく逐語譯に從い、簡明に記したので、釋の部を參考してその意を得べきである。歌詞は、今日の口語に適譯を得られない場合があり、當らずといえども遠からずというべき程度のことも多い。たとえば、妹、吾妹子、君、ワガ夫子の如きも、妻か愛人か、二人稱か三人稱か、種々の用法があつて、現代語譯をすると、その一つに限定されて、誤解されるおそれのある場合も起る。そういう場合は、原語のままに殘さねばならないこともあるのである。枕詞、序詞の如きも、つとめて口譯したが、そのためにかえつて文意の通じないものができたかもしれない。

一、構成は、長歌に限つて、その段節の組織を說明した。

一、釋は、原文の語句、もしくは文を掲げて、その訓法と註釋とを記した。原文の語句、もしくは文の下に、まず訓を掲げ、次に注意すべき異訓のあるものは、參考としてこれを掲げた。但し本書は、諸說を紹介するを目的とするものではないから、訓釋に問題のある句に限りこれを載せることとした。

一、評語は、歌について、批評鑑賞について記し、なおその他の事項にも及んだ。

一、參考は、歌の解釋鑑賞上、參考となるべきものを選んでこれを載せた。

一、かなづかいは、書き下し文、および引用の古文には、歷史的かなづかいを保存し、その他の部分は現代かなづかいに依つた。漢字は、特殊のもの以外はなるべく正體によつた。

一、引用した諸傳本および註釋書の名稱のうち、略號を使用したのは、次の通りである。

桂　桂本　　藍　藍紙本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

金　金澤本
元　元暦校本
壬　傳壬生隆祐筆本
春　春日本
冷　傳冷泉爲賴筆本
西　西本願寺本
矢　大矢本
京　京都大學本
古葉　古葉略類聚鈔
管　萬葉集管見（下河邊長流）
代初　萬葉代匠記初稿本（契沖）
僻　萬葉僻案抄（荷田春滿）
考　萬葉考（賀茂眞淵）
槻　萬葉考槻落葉（荒木田久老）
燈　萬葉集燈（富士谷御杖）
攷　萬葉集攷證（岸本由豆流）
檜　萬葉集檜嬬手（橘守部）
古義　萬葉集古義（鹿持雅澄）

天　天治本
嘉　嘉暦傳承本
尼　尼崎本
神　神田本（紀州本ともいう）
細　細井本
溫　溫故堂本
文　金澤文庫本
類　類聚古集
仙　萬葉集註釋（仙覺）
拾　萬葉拾穗抄（北村季吟）
代精　萬葉代匠記精撰本（契沖）
童　萬葉童蒙抄（荷田信名）
玉　萬葉集玉の小琴（本居宣長）
略　萬葉集略解（橘千蔭）
拙　萬葉集拙解（香川景樹）
墨　萬葉集墨繩（橘守部）
私考　萬葉私考（不明）
札　萬葉集略解札記（岡本保孝）

美　萬葉集美夫君志（木村正辭）　補　萬葉集略解補正（木村正辭）
註稿　萬葉集註稿本（關谷潛）　口譯　口譯萬葉集（折口信夫）
註疏　萬葉集註疏（近藤芳樹）　新考　萬葉集新考（井上通泰）
新訓　新訓萬葉集（佐佐木信綱）　全釋　萬葉集全釋（鴻巢盛廣）
講義　萬葉集講義（山田孝雄）　定本　定本萬葉集（佐佐木信綱・武田祐吉）
新校　新校萬葉集（澤瀉久孝・佐伯梅友）　私注　萬葉集私注（土屋文明）

なお、元朱、元赭、元墨、類墨、神朱などとあるのは、元暦校本、類聚古集、神田本等の諸本に、朱、代赭、別の墨で書いてあるものを示す。その他の諸本諸書を引用した場合は、その名稱を略書しても、ただちにその本その書と知れるように注意した。寫本、版本には、濁點句讀の無いものが多いが、今便宜濁點を附しまた句を切つたものもある。なお引用の歌文の下に括弧して出所を記したもののうち、萬葉集の歌文には、書名を略して、ただ卷數と歌の番號とを記すに留めた。古事記日本書紀の歌謠を引用した場合には、岩波文庫の記紀歌謠集でつけた歌謠の番號を記した。

一、目錄は、原典では各卷の初めにあるが、本書では、まとめて各册の初めに、目次としてその一册の分を出し、その書き下し文の下には、歌の番號を括弧して入れ、その下方に本書のページ數を記して檢索に便にした。

目次

萬葉集卷の第一

雜歌

泊瀬の朝倉の宮に天の下知らしめしし天皇の代

天皇の御製歌（一）……二六

高市の岡本の宮に天の下知らしめしし天皇の代

天皇の香具山に登りて望國したまひし時の御製の歌（二）……四三

天皇の內野に遊獵したまひし時、中皇命の、間人の連老をして獻らしめたまへる歌（三・四）……五三

讃岐の國の安益の郡に幸でましし時、軍の王の、山を見て作れる歌（五・六）……六三

明日香の川原の宮に天の下知らしめしし天皇の代

萬葉集卷第一

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

天皇御製歌

高市岡本宮御宇天皇代

天皇登二香具山一望國之時御製歌

天皇遊二獵內野一之時　中皇命使二間人連老獻一歌

幸二讃岐國安益郡一之時　軍王見レ山作歌

明日香川原宮御宇天皇代

額田の王の歌（七）……七九
後の岡本の宮に天の下知らしめしし天皇の代
額田の王の歌（八）……八四
紀の温泉に幸でましし時、額田の王の作れる歌（九）……八七
中皇命の、紀の温泉に往でましし時の御歌
（一〇―一二）……九一
中大兄の、三山の御歌（一三―一五）……九六
近江の大津の宮に天の下知らしめしし天皇の代
天皇の内の大臣藤原の朝臣に詔して、春山の萬花の艶、秋山の千葉の彩を競憐はしめたまひし時、額田の王の、歌もちてことわれる歌（一六）…一〇九
額田の王の、近江の國に下りし時、作れる歌、井戸の王の和ふる歌（一七―一九）……一一六
天皇の蒲生野に遊獵したまひし時、額田の王の作れる歌（二〇）……一二八
皇太子の答へたまへる御歌（二一）……一二二
明日香の清御原の宮に天の下知らしめしし天皇の代
十市の皇女の伊勢の神宮に參赴きたまひし時、波

額田王歌
後岡本宮御宇天皇代
額田王歌
幸二紀温泉一之時額田王作歌
中皇命往二于紀温泉一之時御歌
中大兄三山御歌
近江大津宮御宇天皇代
天皇詔二内大臣藤原朝臣一競二憐春山萬花之艶秋山千葉之彩一時額田王以歌判之歌
額田王下二近江國一時作歌　井戸王和歌
天皇遊二獵蒲生野一時　額田王作歌
皇太子答御歌
明日香清御原宮御宇天皇代
十市皇女參二赴於伊勢神宮一時　見二波

多の横山の巖を見て吹茨の刀自の作れる歌（三二）……一三五
麻績の王の伊勢の國の伊良虞の嶋に流さえし時、人の哀痛しみて作れる歌（三三）……一三九
麻績の王の、聞きて感傷しみて和ふる歌（三四）……一四二
天皇の御製歌（三五）……一四四
或る本の歌（三六）……一四七
天皇の吉野の宮に幸でましし時、御製の歌（三七）……一四九
藤原の宮に天の下知らしめしし天皇の代
天皇の御製歌（三八）……一五三
近江の荒れたる都を過ぎし時、柿本の朝臣人麻呂の作れる歌（三九―三一）……一五五
高市の連古人の、近江の舊き堵を感傷しみて作れる歌（三二・三三）……一六九
紀伊の國に幸でましし時、川嶋の皇子の作りませる御歌 或る書に高市の黒人（三四）……一七二
阿閉の皇女の、勢の山を越えたまひし時の御歌（三五）……一七六

多横山巖一吹茨刀自作歌
麻績王流二於伊勢國伊良虞島一之時　人哀痛作歌
麻績王聞之感傷和歌
天皇御製歌
或本歌
天皇幸二吉野宮一時　御製歌
藤原宮御宇天皇代
天皇御製歌
過二近江荒都一時　柿本朝臣人麻呂作歌
高市連古人感二傷近江舊堵一作歌
幸二紀伊國一時　川嶋皇子御作歌 或書高市黒人
阿閉皇女越二勢能山一時御歌

吉野の宮に幸でましし時、柿本の朝臣人麻呂の作
れる歌（三六―三九）……一七九
伊勢の國に幸でましし時、京に留まりて柿本の朝
臣人麻呂の作れる歌（四〇―四二）……一九七
當麻の眞人麻呂が妻の作れる歌（四三）……二〇三
石上の大臣の、從駕にして作れる歌（四四）……二〇五
輕の皇子の、安騎野に宿りましし時、柿本の朝臣
人麻呂の作れる歌（四五―四九）……二〇八
藤原の宮の役にたつ民の作れる歌（五〇）……二一〇
明日香の宮より藤原の宮に遷居りたまひし後、志
貴の皇子の作りませる御歌（五一）……二一二
藤原の宮の御井の歌（五二・五三）……二一四
大寶元年辛丑の秋九月、太上天皇の紀伊の國に幸
でましし時の歌（五四・五五）……二一六
或る本の歌（五六）……二一三
二年壬寅、太上天皇の參河の國に幸でましし時の歌
長の忌寸奥麻呂の一首（五七）……二一三
高市の連黑人の一首（五八）……二一六

幸二吉野宮一之時　柿本朝臣人麻呂作歌
幸二伊勢國一時　留レ京柿本朝臣人麻呂作歌
當麻眞人麻呂妻作歌
石上大臣從駕作歌
輕皇子宿二于安騎野一時　柿本朝臣人麻呂
作歌
藤原宮之役民作歌
從二明日香宮一遷二居藤原宮一之後志貴皇子
御作歌
藤原宮御井歌
大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸二紀伊國一
時歌
或本歌
二年壬寅太上天皇幸二參河國一時歌
長忌寸奥麻呂一首
高市連黑人一首

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

譽謝の女王の作れる歌（五九）……二五七
長の皇子の御歌、從駕にして作りませる歌（六〇）……二五九
舍人の娘子の、從駕にして作れる歌（六一）……二六〇
三野の連 名闕 入唐の時、春日の藏首老の作れる
歌（六二）……二六二
山上の臣憶良の、大唐にありし時、本鄕を憶ひて
作れる歌（六三）……二六五
慶雲三年丙午、難波の宮に幸でましし時の歌
志貴の皇子の御歌（六四）……二六七
長の皇子の御歌（六五）……二六九
太上天皇の難波の宮に幸でましし時の歌
置始の東人の作れる歌（六六）……二七〇
作主いまだ詳ならざる歌（六七）……二七二
身人部の王の作れる歌（六八）……二七四
清江の娘子の、長の皇子に進れる歌（六九）……二七六
太上天皇の吉野の宮に幸でましし時、高市の連黑人
の作れる歌（七〇）……二七八
大行天皇の難波の宮に幸でましし時の歌

譽謝女王作歌
長皇子御歌從駕作歌
舍人娘子從駕作歌
三野連 名闕 入唐時春日藏首老作歌
山上臣憶良在二大唐一時　憶二本鄕一作歌
慶雲三年丙午幸二難波宮一時歌
志貴皇子御歌
長皇子御歌
太上天皇幸二難波宮一時歌
置始東人作歌
作主未レ詳歌
身人部王作歌
清江娘子進二長皇子一歌
太上天皇幸二吉野宮一時　高市連黑人作歌
大行天皇幸二難波宮一時歌

忍坂部の乙麻呂の作れる歌（七一）……二八〇
作主いまだ詳ならざる歌（七二）……二八二
長の皇子の御歌（七三）……二八四
大行天皇の吉野の宮に幸でましし時の歌
或るは云ふ、天皇の御製歌（七四）……二八五
長屋の王の歌（七五）……二八七
和銅元年戊申
天皇の御製歌（七六）……二八八
御名部の皇女の和へまつれる御歌（七七）……二八〇
三年庚戌の春二月、藤原の宮より寧樂の宮に遷りたまひし時、御輿を長屋の原に停めて古郷を廻り望みて作りませる御歌（七八）……二九二
一書の歌（七九・八〇）……二九五
五年壬子の夏四月、長田の王を伊勢の齋の宮に遣しし時、山邊の御井にして作れる歌（八一—八三）……三〇三
寧樂の宮、長の皇子と志貴の皇子と佐紀の宮にて宴したまへる歌
長の皇子の御歌（八四）……三一〇

忍坂部乙麻呂作歌
作主未レ詳歌
長皇子御歌
大行天皇幸二吉野宮一時歌
或云天皇御製歌
長屋王歌
和銅元年戊申
天皇御製歌
御名部皇女奉レ和御歌
三年庚戌春二月從二藤原宮一遷二于寧樂宮一時　御輿停二長屋原一廻二望古郷一御作歌
一書歌
五年壬子夏四月遣二長田王伊勢齋宮一時山邊御井作歌
寧樂宮長皇子與二志貴皇子一宴二於佐紀宮一歌
長皇子御歌

萬葉集卷の第二

相聞

難波の高津の宮に天の下知らしめしし天皇の代

磐の姫の皇后の、天皇を思ひて作りませる御歌四首（八五―八八）……三一九

或る本の歌一首（八九）……三二五

古事記の歌一首（九〇）……三二六

近江の大津の宮に天の下知らしめしし天皇の代

天皇の、鏡の王女に賜へる御歌一首（九一）……三三二

鏡の王女の、和へまつれる歌一首（九二）……三三四

内の大臣藤原の卿の、鏡の王女を娉ひし時、鏡の王女の、内の大臣に贈れる歌一首（九三）……三三五

内の大臣の、鏡の王女に報へ贈れる歌一首（九四）……三三七

内の大臣の、采女安見兒を娶し時、作れる歌一首（九五）……三三八

萬葉集卷第二

相聞

難波高津宮御宇天皇代

磐姫皇后思二天皇一御作歌四首

或本歌一首

古事記歌一首

近江大津宮御宇天皇代

天皇賜二鏡王女一御歌一首

鏡王女奉レ和歌一首

内大臣藤原卿娉二鏡王女一時　鏡王女贈二内大臣一歌一首

内大臣報二贈鏡王女一歌一首

内大臣娶二采女安見兒一時　作歌一首

久米の禪師の、石川の郎女を娉ひし時の歌五首
（九六―一〇〇）……三四一
大伴の宿禰の、巨勢の郎女を娉ひし時の歌一首
（一〇一）……三四七
巨勢の郎女の、報へ贈れる歌一首（一〇二）……三四九
明日香の清御原の宮に天の下知らしめしし天皇の代
天皇の、藤原の夫人に賜へる御歌一首（一〇三）……三五一
藤原の夫人の、和へまつれる歌一首（一〇四）……三五三
藤原の宮に天の下知らしめしし天皇の代
大津の皇子の、竊に伊勢の神宮に下りて還り上りましし時、大伯の皇女の御歌二首（一〇五・一〇六）……三五五
大津の皇子の、石川の郎女に贈れる御歌一首
（一〇七）……三五八
石川の郎女の、和へまつれる歌一首（一〇八）……三五九
大津の皇子の、竊に石川の女郎に婚ひし時、津守連通、其の事を占ひ露はししかば、皇子の作りませる御歌一首（一〇九）……三六〇
日並みし皇子の尊の、石川の女郎に賜へる御歌一

久米禪師娉二石川郎女一時歌五首
大伴宿禰娉二巨勢郎女一時歌一首
巨勢郎女報贈歌一首
明日香清御原宮御宇天皇代
天皇賜二藤原夫人一御歌一首
藤原夫人奉レ和歌一首
藤原宮御宇天皇代
大津皇子竊下二於伊勢神宮一還上時　大伯皇女御歌二首
大津皇子贈二石川郎女一御歌一首
石川郎女奉レ和歌一首
大津皇子竊婚二石川女郎一時　津守連通占二露其事一皇子御作歌一首
日並所知皇子尊賜二石川女郎一御歌一首

首 女郎名を大名兒と曰ふ（二一〇）……三六二
吉野の宮に幸でましし時、弓削の皇子の、額田の
王に贈れる歌一首（二一一）……三六四
額田の王の、和へまつれる歌一首（二一二）……三六六
吉野より蘿生せる松が柯を折り取りて遣しし時、
額田の王の奉入れる歌一首（二一三）……六六八
但馬の皇女の、高市の皇子の宮に在しし時、穗積
の皇子を思ひて作りませる御歌一首（二一四）……三六九
穗積の皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣しし時、
但馬の皇女の、作りませる御歌一首（二一五）……三七一
但馬の皇女の、高市の皇子の宮に在しし時、竊に
穗積の皇子に接ひて、事既にあらはれて後、
作りませる御歌一首（二一六）……三七二
舍人の皇子の御歌一首（二一七）……三七四
舍人の娘子の、和へまつれる歌一首（二一八）……三七五
弓削の皇子の、紀の皇女を思ふ御歌四首
（二一九―二二三）……三七七
三方沙彌の、園の臣生羽の女に娶ひて、いまだ幾

女郎字曰二大名兒一
幸二吉野宮一時　弓削皇子贈二額田王一歌
一首
額田王奉レ和歌一首
從二吉野一折二取蘿生松柯一遣時　額田王
奉入歌一首
但馬皇女在二高市皇子宮一之時　思二穗積
皇子一御作歌一首
勅二穗積皇子一遣二於近江志賀山寺一時
但馬皇女御作歌一首
但馬皇女在二高市皇子宮一時　竊接二穗積
皇子一之事既形而後御作歌一首
舍人皇子御歌一首
舍人娘子奉レ和歌一首
弓削皇子思二紀皇女一御歌四首
三方沙弥娶二園臣生羽之女一未レ經二幾時一

時も經ず、病に臥して作れる歌三首
（一三三―一三五）……三八一
石川の女郎の、大伴の宿禰田主に贈れる歌一首
（一三六）……三八六
大伴の宿禰田主の、報へ贈れる歌一首（一三七）……三八〇
石川の女郎の、更に大伴の宿禰田主に贈れる歌一
首（一三八）……三八一
大津の皇子の宮の侍石川の女郎の、大伴の宿禰宿
奈麻呂に贈れる歌一首（一三九）……三九三
長の皇子の、皇弟に與ふる御歌一首（一三〇）……三九五
柿本の朝臣人麻呂の、石見の國より妻に別れて上
り來る時の歌二首 短歌幷せはたり（一三一―一三七）……三九七
或る本の歌一首 短歌幷せはたり（一三八・一三九）……四一八
柿本の朝臣人麻呂の妻依羅の娘子の、人麻呂と相
別るる歌一首（一四〇）……四二三
挽歌
後の岡本の宮に天の下知らしめしし天皇の代

臥レ病作歌三首
石川女郎贈二大伴宿禰田主一歌一首
大伴宿禰田主報贈歌一首
石川女郎更贈二大伴宿禰田主一歌一首
大津皇子宮侍石川女郎贈二大伴宿禰宿
奈麻呂一歌一首
長皇子與二皇弟一御歌一首
柿本朝臣人麻呂從二石見國一別レ妻上來
時歌二首 幷二短歌一
或本歌一首 幷二短歌一
柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子與二人麻呂一
相別歌一首
挽歌
後岡本宮御宇天皇代

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c